

# 調教のすべて

*All about Horse Training*

治郎丸敬之<sup>＝文</sup>  
text by Takayuki Jirōmaru

速く走ることを目的として血を重ねられてきた以上、速く走ることの出来ないサラブレッドはほとんど存在しない。その体内には、父や母、そのまた父や母から受け継がれた、速く走るための血がすでに内包されている。

しかし、実際には、速く走ることの出来る馬とそうでない馬がいる。育成段階では目立たなかった馬がクラシックを制し、ダービー候補と謳われた馬が1勝も出来ずにターフを去る。なぜだろうか。

その答えは調教にある。

サラブレッドの速く走る能力を十全に引き出すことは案外難しい。同じ馬を別の人間が育てれば、全くの違う馬に育つだろう。私たちの人生が生まれてきた環境によって大きく変わってしまうように、サラブレッドの競走成績や生活も、どのような調教を施されるかによって変化する。あのティーブインバクトやウオッカでさえ、もし誰か他の調教師に調教されていたら、あそこまでの名馬、名牝に育っていたかどうか。

ここ数十年の間に、日本の調教技術は格段の進化を遂げてきた。若き情熱的なホースマンによって海外からノウハウが持ち込まれ、従来の常識が打ち破られ、新しい育成、調教施設も次々と作られた。速いだけでなく、強い馬づくりには最高の舞台が整った。いざ出でよ、名馬たち。

現代の日本競馬における調教の全てをここに記す。

栗東トレンの坂路コースが完成したのは1985年のこと。今でこそ関西馬が強くなったのは坂路コースのおかげともはやされているが、完成当初の調教師たちの反応は冷やかかなものであった。実際に、坂路コースを使って追い切られる馬などはほとんどいなかった。そんな中、故戸山為夫調教師は、坂路コースに活路を見出し、坂路コースに己の調教師生命を賭けた一人であった。

彼のもとには、坂路コースがなければ、未勝利馬としてターフを去っていたかもしれないダービー馬がいた。父マダグニテュード、母カツミエコーという、これといって目立ったところのない短距離血統のミホノブルボンは、当時、1億円以上の煌びやかな血統を誇る高馬が続出する中、1000万にも満たない価格でひそやかに取引された安馬であった。しかも、脚元には不安があり、頭が高く、走る姿勢が悪かった。

ミホノブルボンは故戸山為夫調教師によって坂路コースで鍛えられた。「坂路の申し子」と呼ばれ、通常1日2〜3本の厩舎が多い中で、1日4本、多い時には1日に5本も登坂することもあった。ミホノブルボンのトモは異常なほどに発達し、幾層の山のように盛り上がりがあった。私も実際にパドックでミホノブルボンを見たことがあるのだが、他馬の2倍の大きさがあると言われたお尻から伝わってくる力強さに、しばし圧倒されたものだ。

今でも記憶に残っているのは、惜しくも3冠を取り逃がした1992年の菊花賞である。玉碎的に逃げたキョウエイボーガンにペースを乱されながらも、希代のステイヤーであるライスシャワーに最後の最後まで食い下がった走りは、まさに負けて強であった。この菊花賞を最後にミホノブルボンは引退してしまっただが、坂路で内容の濃い調教を積み重ねることによって、距離までも克服できることを証明したのである。

もし坂路コースがなければ、脚元に不安のあったミホノブルボンをここまで鍛え上げることは不可能であっただろう。頭の高い走法も改善されることなく、スタミナのロスも大きかったに違いない。

惨敗を喫した理由は明らかであった。ゴスホークケンが東京スポーツ杯2歳ステークスに臨む中間、左前脚の骨膜炎が出てしまい、思い切った調教が出来なかったのである。もちろん、そんな状況の中でも、斉藤誠調教師は精一杯の仕上げを施し、勝つ意志を持ってゴスホークケンを出走させたのだろうが、現実はその間に甘くなかった。

ゴスホークケンが東京スポーツ杯2歳ステークスに臨むにあたっての調教内容（1週間前と最終追い切り）を、朝日杯フューチュリティステークス時のそれと比較してみたい（※1）。

調教内容の見方については後ほど詳しく説明するが、まず気が付くのは、追い切りが行われたコースの違いである。東京スポーツ杯2歳ステークスが行われた時点では、まだニューポルトラック馬場は完成していなかったのが当然だが、南Dコース（Dコースとはダートコースのこと）で追い切りが行われている。実は、ゴスホークケンはデビュー戦の前はウッドチップコースで追われていたのだが、後ろ肢の踏み込みが深い同馬は、ウッドチップ（木片）で蹄の裏を傷めてしまったことがある。そのため、東京スポーツ杯2歳ステークスではダートコースで追い切られたのである。

しかし、蹄の裏を傷めただけではなく、左前脚の骨膜炎を患っていてもいたため、脚元に負荷の掛かりやすいダートコースではピシリと追い切ることが難しく、1週間前も最終追い切りも馬なりの調整に終始せざるを得なかった。たとえ馬なりでも、しっかりとした時計が出ていれば問題ないのだが、時計的にも5ハロンで68秒0という、重賞に臨むにあ

❖1 ゴスホークケン					
2007年 東京スポーツ杯出走時					
11/07	南D	良	田中勝	72.3-56.1-41.1-12.1	⑦ 馬也 (1週間前)
11/14	南D	良	田中勝	68.0-53.6-40.2-12.3	⑥ 馬也 (最終追い切り)
2007年 朝日杯フューチュリティS出走時					
11/29	美ポ	良	中谷	81.4-66.6-53.3-39.8-11.5	⑦ G強 (1週間前)
12/05	美ポ	良	中谷	65.0-50.4-37.2-11.6	⑥ 馬也 (最終追い切り)

3000mの距離など論外で、もしかすると血統どおりマイル戦でパタッと止まってしまふような馬で終わっていたかもしれない。坂路コースがなければ、未勝利馬としてターフを去っていたかもしれないダービー馬、という表現は決して大袈裟ではないのだ。

故戸山為夫調教師は、ちょうどミホノブルボンが入厩してきた頃に食道ガンに冒され、引退する前に息を引き取った。「私から馬を取ったらガンしか残らない」と冗談を言いながら、坂路調教で馬を鍛え上げることに執念を燃やし続けた。スパルタ調教と酷評されても、馬は鍛えて強くなるという信念を曲げることは決してなかった。そのおかげで、今日の坂路調教があると言っても過言ではない。故戸山為夫調教師の試行錯誤が、現在の坂路コースのノウハウにつながっているのは確かなのである。

ニューポルトラックとゴスホークケン

2007年11月16日、美浦トレーニングセンターに、ニューポルトラック馬場が完成した。そして、わずか1ヶ月も経たないうちに、ゴスホークケンが朝日杯フューチュリティステークスを逃げ切り、ニューポルトラック調教馬として初めてのG1レース勝利を飾った。例年に比べ、極端なハイペースにならなかったことは確かだが、それでも逃げ切りが難しい朝日杯フューチュリティステークスを押し切ったのだから、ゴスホークケンの強さは素直に評価してよいだろう。

ゴスホークケンは新馬戦を1分34秒9という好タイムで圧勝するや、次走、いきなり重賞である東京スポーツ杯2歳ステークスに目標を定めた。そこではキャリア1戦にもかかわらず、初戦の勝ちっぷりや、迫力たっぷりの馬体から溢れ出る素質が高く評価され、何と1番人気に支持されることになった。しかし、プラス12kgの馬体重で出走し、レースでは2、3番手を追走したものの、直線では伸び切れずに4着を確保するのが精一杯という結果に終わってしまった。

ってはいささか物足りない内容であった。この調教内容では、当日のプラス12kgは、成長分を含めても重め残りと考えて間違いないだろう。それでも1番人気になったのは、ゴスホークケンの素質が買われたということもあるが、案外、調教の内容について無関心な競馬ファンの存在もあつたのではないかと邪推する。

ニューポルトラック馬場が朝日杯フューチュリティステークス前に完成したことは、ゴスホークケンにとって大きな福音となった。1週間前の追い切りでは、6ハロンから長めに行って、ゴール前で強めに追うことが出来たのだ。クッション性が良く、蹄の裏を傷めることのないニューポルトラック馬場だからこそその強気の調教であった。1週間前に長めから強く追われたゴスホークケンは、最終追い切りの時点ではぼ仕上がり、馬なりで5ハロン65秒、ラストの1ハロンも追うことなく11秒6というスムーズな走りを見せた。ニューポルトラック馬場でキツチリ追い切られたことによって、ゴスホークケンの体調は明らかに一変した。回避馬が出て8分の1の抽選をぐぐり抜けたことや、レースではすんなりハナに立ち自分のペースで走れたことも勝因のひとつではあるが、ゴスホークケンが力を出し切れる体調にあつたことが大前提にあることは言うまでもない。もしニューポルトラック馬場が11月に完成していなければ、ゴスホークケンではない他の馬が、朝日杯フューチュリティステークスを勝っていたかもしれない。

ミホノブルボンやゴスホークケンのように、競走馬はどのようなハードとソフトで調教されるか（されたか）によって、競走成績だけでなく、その運命さえも変わってくると言っても過言ではない。つまり、どのような施設を使って、どのような内容のトレーニングをしたかが、その馬の成績や能力に直接、反映されるということである。だからこそ、調教師を筆頭とした関係者たちは、どのような調教を施すべきか常に頭を悩ませている。そこには成功もあれば、大きな声では言えない失敗もたくさんあるに違いない。もちろん、レースの結果を予想する立場にいる私たちも、馬の体調や能力を見極めるために、調教を見ない手はないだろう。いや、自分がまるで調教師になったように見るべきなのである。

## 馬は鍛えることで強くなるのか？

ところで、馬は鍛えることで果たして強くなるのだろうか？おそらくこれは私だけではなく、ほとんど全ての調教師が抱えている疑問であり、悩みなのではないだろうか。あまりにも本質的すぎて正しい答えというものがあるとは思えないが、それでも考えないよりはましだろう。

まず「馬は鍛えることで強くなる」という考えを持つ調教師を紹介したい。冒頭に登場した、2冠馬ミホノブルボンを管理した故戸山為夫調教師である。坂路調教は通常1日2〜3本の厩舎が多い中で、1日4本、多い日には5本も登坂することもあり、「スパルタ調教」とも揶揄されたトレーニング方法を確立した故戸山為夫調教師は、自身の調教理論についてこう語る。

天才的に速い馬がどんな厩舎に入ってくれば、私もハードトレーニングなど考える必要はなかったかもしれない。しかし、発足したばかりの厩舎のジョッキーとして育ち、勝てない悔しさを重ねた。調教師としても天才的な馬には恵まれない悔しさがあつた。

ではどうするか。鍛えて鍛えて、鍛えぬいて勝つしかない。ポクサーにしても、力士にしても、練習に練習を重ねたものが強い。100メートルランナーもマラソンランナーも、人一倍練習するものが最後には栄冠をもぎとるのだ。馬にそれが当てはまらないはずはない。

(戸山為夫『鍛えて最強馬をつくる』かんき出版)

故戸山為夫調教師はここで、「天才的に速い馬がどんな厩舎に入ってくれば、私もハードトレーニングなど考える必要はなかったかもしれない」と皮肉を込めているが、本当にそうだとは思っていないだろう。そもそも天才的に速い馬がどんな厩舎に入ってくるなど、どの厩舎においてもほとんどあり得ないことなのだから。それを承知の上で書いている以上、どの厩舎にとってもハードトレーニングは必要だというのが師の真意であろう。

う考えを持つ調教師を紹介したい。トップトレーナーの座に10年以上にわたって君臨し続けている藤澤和雄調教師である。当時は革命的でさえあつた馬なり調教を貫き、広く認めさせた師は、次のように語る。

よくパドックの解説で「うっすらとアバラが浮いた、ギリギリの仕上げ」という言葉を耳にするが、私に言わせれば、やりすぎである。仮にそれでいつも少しばかり速く走れたとしても（私は速く走れるとは思わないが）、そういう体で目一杯のレースをしたら、馬はそのあと、どうなるのか。そんな競走生活を、二年三年と続けさせられる馬は、はたしてハッピーだろうか。レースのときさえ速く走れば、そのあとはどんな状態になってもよいという考え方には賛成できない。

(中略)

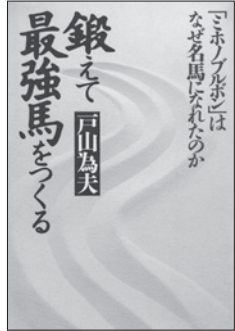
たしかにレースに出走する馬は、体が出来上がっていないければならないが、痩せていてはダメである。レースで勝ちつづけるには、力強い馬体に、元気が満ちていなければならない。

(藤澤和雄『競走馬私論』クレスト新社)

これぞまさに藤澤和雄調教師の調教論の本質である。藤澤和雄調教師と、他の多くの調教師との間にある、たつたひとつの大きな違いがここにある。目一杯に仕上げたままか、そうでないか、の違い。目一杯に仕上げたままか、藤澤和雄調教師は「やりすぎ」とする。

その後のことを考えずに100%に仕上げたままではいけない。肉体的にも精神的にもダメージを受けた馬は、次第に走ることが嫌になり、それを強いる人間に対しても反抗的になる。果たして、その馬の成績は尻すぼみとなり、競走期間は短いものとなる。

もちろん、体が出来上がっていないければ競馬にならないので、80%程度の仕上げでコンスタントに競走に臨ませることになる。肉体的にも精神的にも、多少の余裕を持たせた状態で出走させるのである。馬に力があればそれでも勝てる。果たして、その馬の能力に相



もう一人、「馬は鍛えることで強くなる」という考えを持つ調教師を紹介したい。ダンスパートナー、スペシャルウィーク、アグネスデジタルなど、数々のG1ホースを育て上げ、究極の仕上げの上手さは誰もが認める白井寿昭調教師である。白井寿昭調教師は強い調教について、こう語っている。

マラソンでも日々の努力、毎日のハードトレーニングの結果が反復練習となって厳しい試合で活かされるわけですね。軽い調教をやっていて厳しいレースを勝てるならそれに越したことはないけれども、そういうわけにはいかないのが勝負の世界ですから。やはり持ったままの調教で競馬に通用するかとというと疑問ですね。我々の場合、厳しいレースに対応するにはハードなトレーニングが必要だと思ふからこそ、あれだけの調教を課すわけですね。かといって馬の競走生命が短かったかというところではないと思います。もちろん、なんでもかんでも無我夢中になつてしまうとパンクするでしょうから、待つ時は時期が来るまで待つべきでしょう。

(井内利彰『G1勝利の方程式』白夜書房)

白井寿昭調教師も、故戸山為夫調教師と同じく、毎日の厳しいトレーニングがレースに行つて生きてくるといふ信念を持つて馬を鍛えていることが分かる。だからこそ、持ったままの馬なり調教を施された馬が、いきなり厳しいレースで結果を出すことが出来るという考えに疑問を呈しているのである。

さて、今度は反対に、「馬は鍛えても強くなることはない」とい

応しい成績を残すことができ、競走期間は長く充実したものとなるのだ。

続いて、もう少し具体的に、「馬は鍛えても強くなることはない」という考えを実践している調教師を紹介したい。牝馬のウオッカで日本ダービーを制し、シーザリオ、デルタブルース、ヴィクトワールピサで海外のG1レースを勝つなど、驚くべき挑戦を遂げた結果を出し続ける、日本を代表するトレーナー角居勝彦調教師である。師にいたっては、馬は鍛えても走らないというだけではなく、「馬は鍛えなくてもよい」という考えにまで至っている。

馬は、自分で強くなる。レースを使えば、本能的に120%の力を出し尽くし、その中から何かを学習して成長してゆく。また、レースで酷使した筋肉は、超回復の原理によって、いったん組織が壊れても、適切な休養さえ取つてやれば、よりたくましくなつて回復してくる。調教師は、それを我慢強く見守り、あせらずにじつと待ちながら、その時点での彼らのベストパフォーマンスを引き出すような、管理の工夫をしていければいい。鍛えなくていいのである。

(角居勝彦『勝利の競馬、仕事の極意』廣済堂出版)

それぞれの馬が持つて生まれた能力というのは、調教師がつくり変えられるような甘いものではない。私にできるせめてものことは、彼らの能力をできる限り減らさないことくらいだろう。目先の勝ち負けにこだわつて、馬に無理をさせるようなことはできないのだというわけである。

